

---

原著論文

---

韓国サッカー界におけるキャリア形成に関する一考察  
-韓国から日本へ移りプレーした二人のユース選手のライフヒストリーを手がかりとして-

飯田 義明、佐竹 弘靖、長嶋 博

A study on the carrier formation in the Korean soccer world :  
Through life history of two youth players who transferred their field from Korea to Japan.

Yoshiaki IIDA, Hiroyasu SATAKE, Hiroshi NAGASHIMA

**Abstract**

The purpose of this study is to investigate a process of the soccer player's new carrier on the Korean soccer player. The participants of this study is two players who have dropped out Korean elite system and entered Japanese high school soccer team. All conversation from in-depth, open-ended, semi-structured interviews was translated literally and analyzed.

The results of this study are as follows :

1. The process of socialization on Korean Soccer players is related with a coach.
2. There is a common sense that players don't need academic skill in the soccer world.  
and The player also dropped out because of violence and suppression.
3. A human network consists of an academic clique affects the carrier formation of young players.
4. There is some possibility of the new carrier formation if Korean Soccer players go to Japan to play study soccer.

**Key Words** : Korea, Life history, Youth player, Carrier formation

**キーワード** : 韓国, キャリア形成, ユース選手, ライフヒストリー

## 1. はじめに

戦後長い間、日本と韓国はサッカーにおいてライバル関係であった。特に韓国が1954年のワールドカップ・スイス大会に初出場した際には、日本と韓国は、アジア地区予選で初めて対決をした。この初対決では、勝った方が本大会に出場という戦いであった。韓国の当時の大統領は李承晩（イ・スンマン）であり、「もし、日本に負けたら、玄界灘にそのまま身を投げろ」と発言したほどであった（大島：1996）。そのような関係のなか、2002年にはワールドカップが、アジアで初めて2国間で開催された。結果も韓国がベスト4、日本がベスト16へ進出とお互いに過去最高の成績を残す記念大会となった。日本においては、1993年よりプロサッカーリーグであるJリーグが開幕され、各クラブの下部組織が中心となり選手育成が行われるようになった。そのためそれまで高等学校、大学が中心となり輩出されてきた各年代の代表選手たちが、クラブから多く輩出されるようになってきた。それと同時に、現状では徐々に学校スポーツから地域スポーツクラブへとスポーツの活動場所が移行しつつある。一方、韓国のプロサッカーリーグ（以下：Kリーグ）の開幕は1983年であり、日本より10年も早くスタートしていた（注1）。しかし日本とは異なり、Kリーグの各クラブの下部組織でエリート選手を育成するのではなく、学校体育が中心となってエリート選手を育成している。東アジアの良きライバルである韓国は、日本同様に学校体育を中心としてスポーツが発展してきた。そのため地理的・文化的背景に類似点が非常に多くある社会であり、比較研究の重要性があると考えられる（有田：2006）。日本におけるサッカー研究は、そもそも歴史も文化背景も異なるヨーロッパ諸国から学ぶことで発展してきた。それゆえに歴史的被拘束性があったということはいえるが、その他のアジア社会に目を向けていたとは言い難い（中村、有田、藤田：2002）。韓国社会は、個人の学歴が職業的地位と非常に強く結びついており、子供たちは

日本以上に早い段階から受験勉強など、過剰なまでの受験に対する負荷を背負っている。このような背景のため、韓国でプロサッカー選手（以下：プロ選手）になるためには、一般の学生とは異なる「学歴」を経由しながら成長していくのである。一般的にプロ選手を目指す子供たちは、プロ選手を頂点とするピラミッドを形成している競争社会の階層を一段ずつ上がっていかねばならない。しかし、その頂点であるプロ選手にまで辿り着ける選手はほんの一握りしかないのである。日本では「スポーツへの社会化」という視点から、そのピラミッドからドロップアウトする選手やバーンアウトする選手に関する研究が、1980年代半ば頃から社会学や心理学を中心として行われてきた（吉田：2006）。前者に関する研究は、競争原理とは異質の要因に関することに注目して行われ（海老原：1998）、後者に関する研究としては、その発生メカニズムの解明を目指して行われてきた（中込、岸：1991 吉田：1994）。しかしそれら一連の研究は、その後の人生も含めたライフサイクルの一部としてスポーツ経験を捉えた質的で包括的な研究ではない。また、そのような視点からの研究は、まだその蓄積が不十分である。一方、近年では「選手から一般人への社会化」すなわち引退後のセカンドキャリアの研究では、ライフサイクルの視点を含めた研究が生産されてきている（豊田：1996, 2000）。同様に韓国でも、一流競技者の研究においてはその殆どが現役競技者に向けられており、ライフサイクルの視点から研究しているものは、競技引退後を課題とした研究が僅かに行われているのみである（金：2000, 2002）。

そこで本研究は、韓国のエリート育成過程からドロップアウトし、日本の高校で新たなサッカーキャリアを形成している選手に、ヒアリング調査を行い、その内容に注目して韓国のエリート育成過程の現状と新たなサッカーキャリアの形成の可能性について検討したいと思う。

## 2. 研究方法と調査概要

### 2-1 研究方法

研究方法としては、ライフヒストリー法を用いて分析を行った。ライフヒストリー法とは、大きな歴史の流れの中でとらえた個人の歴史に関心をもち、それを調べる手段の一つとしてインタビューや語りが用いられ、語られた内容の裏付けとして各種の資料や史的検証も重視する(やまだ：2005)。そしてこの方法を用いて、インタビュー内容を時系列的に順序の入れ替えなどの編集を行い再構成し分析を加えた。

調査は半構造的 (semi-structured)、深層的 (in-depth)、自由回答的 (open-ended) インタビューにより実施した。内容は被験者の許可を得てICレコーダに記録をした。インタビューは約3時間にわたって行われた。また、テープはテキスト化 (42,699文字) されたが、不明な点などは再度、電話による確認を行った。加えて、関連する資料収集も行った。

### 2-2 調査協力者

本論文における調査協力者は、韓国の高校時代にサッカー部を辞め、その後日本の高校に再入学し、現在もプロ選手を目指し日本の大学でプレーしている2名 (A君, B君) の選手である。

#### (1) A君

- ・年 齢：21歳
- ・家族関係 父母は小学校時代に離婚 (本人は父と、妹は母と)
- ・両親の仕事：父はタクシーの運転手
- ・出身地：韓国ソウル市内
- ・開始時期 小学校5年生
- ・高校1年生まで韓国のサッカー名門高校に在籍していたが、その後、高校を辞めて一人でアルバイトをしながら生活していた。その後日本の高校に1年生から入学した。高校3年当時、韓国U-19の代表候補に選出されている。現在は、プロ選手を目指し日本の大学に進学しサッカーを続けている。

#### (2) B君

- ・年 齢：20歳
- ・家族関係：父母 兄との二人兄弟
- ・両親の仕事：父は大学教員、母は小学校教員
- ・出身地：韓国ソウル近郊の町
- ・開始時期：小学校5年生
- ・小学生時は県内の代表、中学生時に韓国U-15候補であった。その後、韓国のプロチームの下部組織であるユースチームに1年間在籍し、サッカーとは別にクラブの近くの高校に通っていた。その後、クラブチームの監督とトラブルを起こして辞め、最終的に日本の高校に進学した。現在もプロを目指し、日本の大学でサッカーを継続している。

## 3. 選手たちの事例

### (1) ケース1：A君の場合

A君がサッカーを始めたのは、小学校の5年生の夏過ぎからである。それまでは、特に何かスポーツをやっていたわけではなかった。本人の学校にはサッカー部はなかった。しかし、サッカーに興味があり、一日中友達とサッカーボールを蹴っていた。それを見た他のチームの監督 (注2) に身長が高く、体格が大きかったという理由からスカウトされた。監督の積極的なアプローチもあり、また本人もサッカーをしてみたいということもあり、親を説得して夏休み終了後、転校してその小学校でサッカーを始めることとなった。しかし、単純にサッカーを始められたわけではなかった。当初、親にサッカーを始めたいと話した時に、親からは反対された。理由は、本人が長男であり、かつ親の世代のサッカー選手は、貧しく、勉強もできない人がするものだという固定観念を持っていたためのようだ。特にA君は、小学校の成績も良かったこともあり、お爺さんとお婆さんが強行に反対した。そこで、監督が小学校を卒業するまでの寮費などを含む、経済的負担も面倒をみてくれるという条件も提示され、親・家族を説得してくれ、サッカーを始めることができるようになった (注3)。

小学校時代は、ソウル市内大会や、その他の大会でも何度か優勝しており、中学校への進学に関しても多くの名門中学校の監督にスカウトされた。そのため中学校への進学は自分の好きな学校を選択することが可能であった。家族と相談し、ある名門中学校へ進学することとなった。その理由としては、家庭的事情から金銭面などの経済的負担を免除するという約束であったからである。しかし、入学してみるとその約束が反故にされていた。この約束は、小学校の監督と中学の監督が相談し決められていたことであった（二人は先輩後輩関係であった）。A君の場合、家庭的な事情からお金を学校に入れることができなくなり、サッカーを辞めることとなった。そして2ヶ月くらい一般の生徒として学校に通っていた。小学校時代の監督が、A君がサッカーを辞めてしまったのを知り、その理由を本人から確認し金銭的な約束反故を知ることとなった。その監督が、約束を履行されなかったのは自分の責任だということで、自分の先輩に当たる他の中学校へ転校してサッカーを続けることとなった。この際も、金銭的なことは次の中学校が負担してくれることとなった。中学校を転校することは一般的に行われているが、3ヶ月間は登録することができなかったため、大会等に参加することはできなかった（現在は半年間）。中学校での日常生活は、授業前に朝練習をして、午前中の授業のみ参加し、昼に寮に戻り昼食をとって少しの休憩後、学校に戻り午後から練習をすることになる。そのため、一般の学生と異なり午後の授業には出席しなくなる。これは、公立の学校でも同様である。ただし、指導者からは勉強もしなさいといわれ試験等は受ける。だが実質的には、全国大会などは平日にもあり遠征などで授業に出席できないことは、当たり前のようにあった。そのためA君は、小学校時代の成績は優秀であったにもかかわらず、中学入学時はクラスメイトにノートを借りたり、教えてもらっていたりしていたが徐々に理解できなくなり、勉強のやる気を失っていくこととなった。1年次は転校の関係で試合には殆ど出場することは

できなかった。2年次は、大会で目立った成績は収められなかった。最終学年の3年次には、全国大会で優勝をすることができた。韓国サッカー界では、名門サッカー強豪高校に進学するためには全国大会などで上位に入らなければならない（注4）。大会自体は年間に5、6回あり、どの大会に参加するかは監督が決めていた。すべての大会に参加することは、親の経済的負担を考慮すると無理があったようである。A君は全国大会優勝などから、5つの高校よりスカウトを受け、自分で選択できる立場になった。A君が中学監督と相談し選択した高校は、条件として学費、サッカー部に関する経費（スパイク、用具）、寮費も免除してもらえた。また、同中学の3年生で試合に出場できなかった選手も4名引き受けてくれた。

高校に入学し、1年生から試合に出場をしていたが、負けた時に先輩などから文句をいわれたり、先輩など周囲の目を気にしながら気兼ねしてサッカーをすることが嫌になってしまった。また、寮生活では一番上の学年（中学3年）から一番下の学年（高校1年）になり、先輩の仕事、マッサージ、洗濯等々多くの雑用があり、ストレスが溜まってしまった。学校を辞めようとしたが監督や親に説得をされた。しかし、どうしても我慢できなかったために結局自宅を飛び出して一人でバイトしながら生活することとなった。その後、半年間くらい家とは連絡を取らずにいたが、小学校時代の友達とは連絡を取っていた。友達を通して小学校時代の監督から連絡を受けて会うことになり説得を受けた。ただ、韓国の高校に戻ることはできなかったし、他の高校に転校することもできない状況になっていた。そこで、たまたま、小学校時代に一緒にプレーしていた友達が日本の高校に行くことになっていたので、一緒に日本の高校に行かないかと勧められた。小学校時代の友達も、先輩や周囲の目を気にしながらサッカーをしたくないとの理由であり、A君と思いは同じであったようである。そして監督にエージェントを紹介してもらった。親は、韓国の高校に入学し直す事が難しい現状、

また日本の学校が様々な面で免除してもらえることなどの条件があったため、日本の高校に入学する事となった。日本では、インターハイと選手権に出場することができた。

高校卒業に際しては、U-19候補に選ばれた事もあり、韓国の大学も考えたが日韓の制度的な問題もあり、韓国の大学への入学は困難であった。韓国のKリーグのスカウトからの話もあり、韓国に帰国するつもりであった。3年次の選手権出場の後、日本の大学からもスカウトをされた。Kリーグの環境は、Jリーグより悪く、高校卒業でプロの選択もあったが、その後の人生のことを考慮し、日本の大学に進学することにした。

## (2) ケース2：B君の場合

B君の両親は、父親が大学の教員で、母親が小学校の教員であった。小学校3年生の時に母親が自分の学校に転勤してきた。運動好きで1年生の頃からサッカーに興味があり、体育の授業などでは活躍して、学校内では有名だった。3年生の時にサッカー部を見学に行った際に、監督が怖く、練習中に選手を殴ったりしているのを見ていたため、サッカー部自体には良い印象を持っていなかった。しかし、上級生に誘われて話をしたら、優しくかったので入部をしようと決めて親に話したところ、母親に反対をされて3日間練習参加しただけで辞めることとなった。3日目は、母親が練習場まで来て、B君を連れて帰ったそうである。母親は、サッカー部の体質をよく理解していたため、B君の入部には抵抗があった。しかし、4年生時に1週間、母親の許可がおりて参加したが、結局1週間でまた辞めることとなった。その後、サッカー部には入部しなかったが、5、6年生でチームを作り、地方大会に参加もした。ある大会でベスト8になることができ、またその大会で活躍をし、再びサッカー部に入部することとなった。両親の反対はあったが、監督が何度も自宅に足を運び、最終的には校長にもサッカーを勧められて入部することとなった。小学校でも寮に入るようになっていたが、親との約束で、サッカーは小学校までで、

かつ自宅から通う約束をさせられていた。当時は、5時の練習後、5時から7時まで絵の勉強に行き、その後帰宅して1時間勉強することとなっていた。中学校への進学時は、サッカーでスカウトされたところには、親との約束があったため進むことができなかった。そのため中学1年時は、サッカー部のない普通の学校に通っていた。当時の小学校の監督は、サッカーがあった中学校の監督と仲が良く、B君をそこへ進学させるつもりであったが、強固な父親の反対があり近所の普通中学校へ進学した。その頃の成績は、常に学年で10番以内であった。

しかし中学校の監督が、毎日昼休みにB君が入学していた学校に来て、昼食をしながら口説かれ、B君がやりたいと発言しているところをカセットで録音して、親に聞かせ納得をさせたのである。そして1年の11月に小学校の監督と仲の良かった監督がいる中学に転校し、サッカーを始めることとなった。そのかわり、親と勉強と両立することを約束させられていた。そのため寮生活はできず、毎朝4時に起きて学校に通っていた。監督は優しくかったが、先輩から毎日のように殴られ、バスで2時間かけて通っていたこともあり、3ヶ月間しか続けることができなかった。最大の理由は、同じクラスのサッカー部の友達が、家に逃げ帰ってしまい学校に行かなくなってしまった。その責任を取らされる形で、毎日殴られた。シャワーを浴びている時に、自宅で母親にその黒くなっていた痣を見つかり、1週間くらい学校へ行かせてもらえず、監督が他の学校へ代わることを許可した。そして自宅近くの中学に転校したが、そこに新たにサッカー部ができていたが、選手もまだ8人しかいなかった。しかし監督が非常に良かったこともありそこに入部することとなった。以前、自分が辞めたサッカー部から他に1年生が8人転校してきて、一段と楽しくやることができた。この時の監督は、試験の2週間前から練習が休みになるため、勉強も問題なくすることができていた。またクラス40名程だが、30番以下になると1ヶ月間練習に参加させてもらえなくなった。2年生時は、公

式戦に一度も勝ったことがなかったが、3年生時には、全国ベスト16に入ることができたのである。そして韓国のU-15の候補に選出されインドネシアなどと試合を行っている。高校からスカウトを受けたが、当時、韓国の優秀選手を13名選出し、その中から5名フランスへ留学させるプログラムがあり、選出されテストを受けることとなったが落ちた。しかし、そのテストを見学に来ていた20名ほどの高校の監督から名刺を貰うこととなった。当時の気持ちとしては、第一に新たな経験をしたかったことと、第二にサッカーで成功することより、とにかくサッカーをしていることが楽しくてしかたがなかったことであった。最終的に選択したのは、高校ではなく韓国Kリーグのクラブの下部組織であった（注5）。高校の時は、クラブの寮に入り、サッカー有名校ではない一般の高校に進学した。クラブの指導者は勉強に関しては何も言わなかったが、親に叱られると思い消灯後トイレに行って勉強していたが、周囲の友達に「サッカー選手には勉強なんていらねえ」、「何で勉強なんかするのか」と言われた。そのため勉強をしなくなり、この頃から家で親と勉強の事で喧嘩するようになった。しかし、1年生の夏頃に選手間の人間関係のため試合のメンバーから外されるようになった。また練習自体が強制的な事が多く、自分と合わないと感じるようになっていた。そのため4ヶ月間くらいチームを探してみたけれども見つかる事ができないままクラブを辞めた。サッカーを1週間に3回ほど中学校で練習をさせてもらった。ただ、将来的に大学やKリーグでプレーすることを考えると、強豪の高校で活躍しなければならないので、今後の事など悩んでいた。そんな折りに、中学校時代の監督の先輩が、エージェントをしていたため紹介してもらった。B君は海外への留学を考えており、親もそれに賛同しておりエージェントと話し合いをし、スペインでクラブを探す事となった。しかし、ビザ等の問題が長期化していたため、その間に身体がなまらないように、エージェントの関係で日本の高校で2週間ほど練習をしていた。一時帰国し問

題の解決を待ったが長期化しそうであったために、1年次の1月に日本に来る事となった。日本でのプレーには自信を持っていたが、直ぐに靱帯を伸ばし3ヶ月間リハビリをし、復帰して直ぐに疲労骨折をするなどした。そのため、2年次は全く公式戦に出場する事ができなかった。怪我を繰り返しており、3年次の夏前に下のチームに落とされた事もあり、自信をなくし韓国に黙って帰ってしまった。その際、父親に日本に帰りたくないと言ったところ、いい加減な気持ちで日本に行ったのか。もう、お前のような息子はいないから、サッカーを辞めなさいと言われ、その言葉を聞いてから考え直した。再び来日してからは、選手になり冬の高校選手権にも出場するまでになった。大学への進学は、日本で満足な結果を出す事ができなかったのもう一度、一からやり直して活躍して韓国に帰国したいと考えたために選択した。

#### 4. ライフヒストリーから見える結果と考察

二人の語りから見えてくることに若干の考察を試みてみた。韓国ではサッカー選手（スポーツ全般的に言える事である）に対しては、貧しい階層の人々がするものというイメージをもっているようである。韓国では、朝鮮時代の儒教思想から「文を崇め尊んで、武を軽視する」という影響で現在も学歴を重視する社会構造をもっている（金：2000）。この「学歴主義的社会イメージ」は社会の貧困層においても共有されているのである（有田：2006）。A君の場合、家庭が金銭的に特別に恵まれていたとは言えないが、それでも反対をされたのは「武」を軽視した古い考え方に影響を受けていたと考えられる。本人の語りからも、それが伺える。それでも最終的にサッカーをすることを許してもらえたのは、父親の「自分の道を進みなさい」という考え方とエリート・スポーツ競技者として成功すれば、高学歴を体育特待制度によって得る事が可能だから（金：2002）ではないかと判断できる。また学費、寮費などの生活等の面倒をみる奨学金

制度などの条件があったからであろう。B君の場合、両親が教員ということもあり、両親は「高学歴」であり、金銭的には裕福な階層に属していたといえる。そのため、サッカーをする事に絶対賛成はせず勉強をさせようとしていた。それでもサッカーを選択したのは、指導者が本人や家族、家族の周囲の人間（母親の職場の校長）を巻き込んで説得し、かつ寮生活をしなくてもよいという条件があったからである。そのため親からすれば、自宅で勉強をさせられるという安心感があったからではないだろうか。金の研究では、個人種目選手のみを扱っているが、サッカーのような集団種目においても、家族ではなく専門の指導者が「スポーツへの社会化」への扉を開けるのである（注6）。この結果は「スポーツへの社会化」への関与という意味では、金の先行研究を支持しているといえる。一方で、両者を家庭の経済的背景から考察すると、韓国社会では経済的地位が低い家庭が、スポーツを媒介として上昇的社会移動を志向している（金：2000）とする金の指摘にA君は当てはまる。そして金は、権の研究を引用して、上流社会階層が自分の子供を運動選手にさせない理由として、一つは、伝統的価値観による運動生活は知的生活に比べ経済的、社会的に将来性が低いとされていること。二つ目は運動生活終了後の社会に進出したとき職業や身分がほとんど保証されていないこと。三つ目は、運動による生涯に対する対策の不備、学校の成績と無関係に特待生にし、社会の低所得者が掛け金としてスポーツに参加すること、の三つを上げている（金：2000）。しかし、B君は経済的地位も比較的高いにもかかわらず、最終的にサッカーを選択している。このような現象は、韓国社会が経済的に底上げされるほどに現れる可能性がある。ある意味では、何を職業としても以前のような貧しさになるという心配がないからである。また一方でサッカー界の急速なグローバル化により、韓国選手が日本やヨーロッパなどの各リーグで活躍しており、経済的にも韓国のプロリーグで得られる年俵以上の一生生活できる莫大な経済的成功も手にで

きるようになったことも要因のひとつであると思われる。「スポーツへの社会化」のエージェントとして指導者が関与していることが明らかとなったが、小学校から中学校、高等学校へ進学する際は、その優秀な選手のみを特待制度に入れるのではなく、優秀な選手と抱き合わせて数名の選手を進学させるなど、細かな箇所でのスポーツ界特有の指導者側からの別の問題点がそこには潜んでいる可能性が高いと思われる。なぜなら指導者の殆どは、プロの指導者として学校と契約をしている。そのため結果を残すことができれば職を失ってしまうことになる。そこにはエリート・スポーツ選手の育成を学校体育に強度に依存した、韓国社会が抱えた構造的問題が存在している。一方、スポーツ界においても選手引退後に働く職場として学校指導は機能している。この両者の思惑が一致した結果、この制度が維持強化されてきたという歴史的問題があるように考えられる。

エリート選手たちは、小学校の段階から学校による授業時間の免除などを認められているため、途中でドロップアウトをした場合、一般の学生生活に戻ることが困難になってしまう。この問題は中学、高等学校とより高等教育へ進学するほど深刻な問題となるのである。そのため韓国ではスポーツ選手になるかどうかの選択は、小学校の時点で子供たちに迫られていると考えられる。

次にエリート選手の育成過程、すなわち体育特待制度で進学した選手の勉強に対する意識をみた場合、A君は、小学校時代は勉強も優秀であり、中学でも勉強することを意識していたが、平日に行われる遠征試合、練習に充てられる午後の授業分の遅れなどがあった。中学入学当初は、友人などにノートを取らせてもらい、遅れて理解できない箇所は教えてもらっていたが、徐々に勉強に対しての意欲が失われていった。そして勉強は、最低限の社会で生活できるレベルのみでよいと自分から中学1年で勉強を放棄するようになってしまった。B君の場合は、両親が教員ということもあり、勉強に関しては厳しくさ

れていた。小学校時は、サッカー部に入学しても寮に入らないということが約束になっていたため、自宅で勉強をさせられていた。そのため、勉強自体は必ずするものという意識を持っていた。中学校へは、親との約束があり地元の学校へ進学して成績は常に学年で10位以内にいた。本人は、学力的には高くない地方中学校であったからこの順位が取れたと考えている。その後、有名サッカー部の中学校へ移り再度中学を移るが、サッカーは勉強とともに続けていた。しかし、高校年代にプロチームの下部組織のユースクラブに入り寮生活を始めるも、勉強に関しては消灯になってからトイレで仲間隠れてするなどしていた。しかしA君と同様、徐々に勉強意欲を失ってしまった。金によると競技生活後に成功するには、選手時代に学業も含め、自身の「戦略」をめぐらせる努力が必要であると指摘している（金：2002）。しかし、本人に勉学の意識があっても周囲が勉学に対する意識が低いこと、また指導者を含めてスポーツの社会全体がスポーツ選手には勉学が不必要だという意識がある。そのため、戦略的に選択をして引退後に成功した選手は、本当に一部の優秀な選手であったといえる。その意味で事例の二人は、学業はあまり重要視していないスポーツ界の閉じられた特殊空間に徐々に取り込まれてしまったようである。P・ブルデューが指摘している「場」の概念を用いて、韓国のサッカー界という「場」の組織、価値体系、規則などを解明し、どのような社会システムでサッカー界に関わる人々が再生産されるかを明らかにしなければならないだろう（ブルデュー：1990）。

では彼らは、なぜ韓国のエリート育成過程からドロップアウトしたのであろうか。A君は、奨学生として保証されていたにも関わらず、その約束が反古されたことによる経済的問題、寮生活での先輩による暴力問題などによりドロップアウトすることとなったのである。B君もやはり先輩からの不条理な暴力と指導者との不仲が原因であった。特に暴力や指導者との不仲は、日本でも見られる現象である。両国は、学校体育が競技スポーツを担っていたため、選手が指導

者や他の選手達と問題が発生しても他のチームに移動してキャリアを継続することは困難である。韓国では、学校運動部はいわゆる“縦社会”によって成り立っており、軍隊生活そのまま真似しているようなきらいがある。特に高校や大学の特待生の寮生活は、まさに軍隊そのものであり、学年差による厳しい“暗黙の”規律によって成り立っており、これにより多くの競技者が学校を中途退学し競技から離れることを余儀なくされている（金：2000）。本来、競技スポーツ界は「競争原理を前提とした社会」を自明としている。そのため怪我や競技能力の限界による離脱は、止むを得ない現象である。その一方で、暴力や抑圧など不条理な理由からサッカーの選手キャリアを断絶することには、大きな問題が存在している。

本事例では、二人とも一度、中学校を辞めて転校しているが新たな学校で活躍をしている。特にA君は、強豪学校から別の強豪学校への転校であるため、本人による自由意思による転校ではなくエージェントが介在し行われたのである。日本では、ほとんどこのようなケースは見られないが、韓国では国家政策として学校にスポーツを組み込んできたという経緯があるため、このようなケースは珍しくはない。ただし、頻繁に利用されないように転校後の試合出場は、6ヶ月間禁止されている。この時、エージェントとして介在する人は、小学校や中学校の監督である場合が普通だが、単にサッカー関係者というだけではなく、その先輩後輩関係などサッカー学閥とでもいうような人的ネットワークによって形成されているのである。これは、彼らが同じ学校出身によるサッカーを通した縦社会による影響、寮生活による軍隊的な厳しく不条理な生活を共に過ごしてきたことと無関係ではなからう。すなわち、彼らはスポーツの社会化への扉を開くだけでなく、その後に発生する問題も含め選手のキャリア形成を助けてもいるのである。またA君もB君も韓国ユース世代におけるサッカー選手としてのキャリアは1年で閉じることとなった。しかし、日本へのサッカー留学を用意し、サッ



カー選手としての新たなキャリアを助けたのもエージェントと呼ばれる者たちであった。このエージェントは、中学校時に転校したケースとは異なり、代理人と呼ばれる職業として選手の遣り取りを行っている人々である。彼らも狭いサッカー界の人的ネットワークに属する人間である。このようなエージェントは、Kリーグがスタートした1980年代の後半から増加しているようである。これは、韓国サッカー界でプロ引退後の新たな職業になっている可能性がある。以前とは異なり、サッカー界自体が1990年以降急速にグローバル化し、選手移動が世界的規模で行われるようになり、選手としての頂点を極めようとする者や経済格差を利用して経済的上昇を目指そうとするものが増えたこととも無関係ではないであろう。また、今回の事例のように日本の高等学校に留学するためには、韓国選手にとっては経済的問題も存在する。それゆえ、経済的援助を行う日本側の受け入れ高校にも何らかの理由が存在していると考えられる。

A, B両君は、日本での高校卒業後、ともに日本の大学への進学をしている。現在のA君は、大学進学を後悔はしていない。進学することにより、韓国でプロ選手になることができるかどうかは定かではないが、サッカーキャリアが終わった後に、自分を育ててくれたサッカーによって日本と韓国を橋渡しするような仕事を視野にいれている。B君も日本での高校時代に挫折を繰り返し、満足できる結果を出すことができなかったため、日本の大学で一から出直して結果を残そうと努力している。その意味で彼らは、日本という新しい場所に環境を移したことによって、サッカー選手としてのキャリアを閉じることなく継続することができた。そして、一般の韓国サッカー選手とは異なるキャリア形成の道を歩もうとしている。彼らは、韓国のサッカー界に限られた狭い世界観でキャリア形成するのではなく、日本社会と比較することによって様々な価値観、世界観を広げていっているように思える。ただし、これは世界で一番大きなプロスポーツ市場を形成しているサッカーであるがゆえに可能なのか

もしれない。

## 5. まとめと今後の課題

本研究は、韓国のエリート育成過程からドロップアウトし、日本の高校で新たなサッカーキャリアを形成している選手に、ヒアリング調査を行い、その内容に注目して韓国のエリート育成過程の現状と新たなサッカーキャリアの形成の可能性について検討した。事例からは1) 韓国サッカー選手の社会化への過程には、指導者の強い関与が示唆された。2) サッカー界には、勉学が不必要という世界観があり、かつ選手は勉学が受けられないという社会構造的課題とも重なり、その世界に取り込まれている。また不条理な暴力、抑圧などによるドロップアウトの存在も示唆された。3) サッカー学閥による人的ネットワークが、育成過程の選手のキャリア形成に影響を与えていることが示唆された。4) 日本にサッカー留学することにより、早期の段階での勉学がサッカーかという選択ではなく、新たなサッカーキャリアの形成の選択可能性があることが示唆された。

本研究では、二つの事例の聞き取りから一つの可能性を検討したに過ぎない。しかし、当事者自身によって身体を通して、かつ見られてきた者としての経験の意味と解釈にたどりつこうとする質的研究はまだ途についたばかりである。スポーツ研究は、常にトップアスリートの選手期間に注目をして研究を進めてきた。しかし、その輝かしい期間はライフサイクルの一部であるということを自覚し、今後はそこから零れ落ちた人々とその日常世界にも目配りをし、研究を進めていく姿勢も必要であろう。

## 付記

本研究は平成18年度専修大学研究助成（共同研究：韓国におけるアスリートの進路選択に関する基礎的研究）を受けて行われた。

## 注

(1) 張は、全斗煥大統領の第5共和国のスポー

ツを財政的側面から分析している。それによると、全斗煥時代に体育局を体育部（日本の省）に昇格させ'86アジア競技大会と'88ソウル・オリンピック大会の誘致し、「産業立国」からスポーツを通じて国威宣揚する「スポーツ立国」へと韓国スポーツの方向を提示したと指摘している（張：1994）。また金は、1980年代に恐怖政治や縁故賄賂政治とも表せられる全斗煥軍事政権下で、大衆懐柔策としてサッカーがプロ化されたと指摘している（金：2006）。

- (2) 韓国のスポーツ界では、エリート・スポーツの育成は学校教育ない出行われている。しかし、日本のように学校の先生が、課外教育としてスポーツを担っているのではなく、専門家がプロもしくはセミプロとして担っている。現在の日本の教育でも、プロの指導者が高校以下の現場にも入ってきている。
- (3) 韓国のエリート選手達は、小学校の段階から寮生活でくらしている。またサッカーができる学校も特定の指定校のみである。そのためドロップアウトするとエリート・スポーツへもどることはなく、一般の草サッカーを継続するしか方法はない（後藤：2001）。
- (4) 「四強制度」といわれ、以前まで全国大会で4位以内に入らなければ上位の学校への進学ができなかった。現在は廃止されたが、まだ慣習として残っている。
- (5) 韓国Kリーグの各クラブは、日本のような下部組織のユースチームを運営していなかった。しかし、2002年以降3つのクラブで下部組織が立ち上げられた。
- (6) 日本でも以前は、家族によるスポーツのエージェントによる地位が低いとされているが、近年、プロボクサーの亀田3兄弟に代表されるように、様々なスポーツにおいて、親が幼年期から親の希望するスポーツをさせている状況がある。

## 参考・引用文献

- ・有田 伸（2006）：韓国の教育と社会階層－「学歴社会」への実証的アプローチ－，東京大学出版会，p.284.
- ・ブルデュー・P(1990)：ディスタンクシオンI，藤原書店。
- ・海老原修（1998）：組織的スポーツからのドロップアウトに関する研究，体育・スポーツ社会学研究 7，pp.107－129.
- ・金 大勲（2000）：「韓国元一流競技者のライフヒストリーに関する研究」中込四郎（代表）編：平成9年度～平成11年度科学研究費補助金（基盤研究C（2））研究成果報告書 スポーツ選手の競技引退に関する心理社会学的研究，pp.72－85.  
（2002）：韓国本一流競技者の「引退」への事例研究－「学歴社会」と「戦略」の狭間－，スポーツ社会学研究 10，pp.101－114.
- ・金 明美（2006）：エリートと「草の根」が同居する韓国済州島のサッカー「季刊 民族学 No. 117」，（財）千里文化財団，pp.60－65.
- ・後藤健生（2001）：悩める韓国サッカー「季刊 サッカー批評 09」，双葉社，pp.26－31.
- ・張 世昌（1994）：韓国におけるスポーツの財政政策に関する研究－第5共和国における体育の設置と国民体育振興法第4次改正を中心に－，いばらき健康・スポーツ科学 11，pp. 1－10.
- ・豊田則成，中込四郎（1996）：運動選手の競技引退に関する研究－自我同一性の再体制下をめぐって－，体育学研究，41（3），pp.192－206.  
（2000）：競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化，体育学研究 45，pp.315－332.
- ・中込四郎，岸順治（1991）：運動選手のバーンアウト発生機序に関する事例研究，体育学研究35，pp.313－323.
- ・中村高康ほか（2002）：学歴・選抜・学校の比較社会学－教育からみる日本と韓国－，東洋館出

- 洋館出版社, pp.12-15.
- ・大島裕史（1996）：日韓キックオフ伝説－宿命の対決に秘められた「恨」と「情」－, 実業之日本社刊, p.16.
  - ・やまだようこ（2005）：教育研究のメソドロジー－学校参加型マインドへのいざない－, 東京大学出版, pp.191-216.
  - ・吉田 毅（1994）：スポーツ的社会化論からみたバーンアウト競技者の変容過程, スポーツ社会学研究 2, pp.67-79.
  - ・吉田 毅（2005）：アスリートのキャリア問題 「現代スポーツのパースペクティブ」, 大修館, pp.210-227.